

水産業のすがた

■ 漁業の概況

本県は、面積で見れば全国43位ですが、海岸線の延長距離が約430kmと長く（全国27位）、黒潮の影響を受けるため、東京・横浜という大都市に近接しながらも相模湾や東京湾は多種多様な魚介類に恵まれています。

三崎漁港を基地として世界の海で主にまき網やはえ縄でかつおやまぐろを漁獲する遠洋漁業、主に伊豆諸島周辺海域でたもすくいや釣りにより、さば、きんめだい、むつなどの底魚（そこうお）を漁獲する沖合漁業や定置網、釣、まき網、刺網など、様々な漁法で多種多様な魚介類を漁獲する沿岸漁業のほか、わかめ、のりなどの海藻類を生産する海面養殖業が行われており、平成26年の漁業生産量は33,108トン・漁業生産額は152億円でした。

かながわ漁業の主要項目（平成26年）

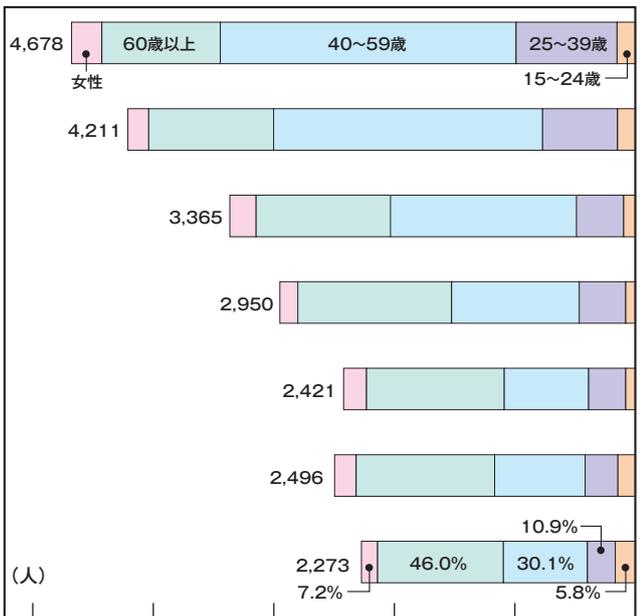
項目	単位	神奈川	全国	全国順位
漁業経営体数	経営体	1,157	94,507	28
漁業就業者数	人	2,273	180,985	28
漁船隻数	隻	2,096	152,998	28
海面漁業・養殖業生産量	t	33,108	4,769,372	29
海面漁業	t	32,078	3,717,258	23
海面養殖業	t	1,030	987,639	27
海面漁業・養殖業生産額	億円	152	14,111	26
海面漁業	億円	148	9,668	21
海面養殖業	億円	4	4,443	28

経営体数、就業者数及び漁船隻数は「平成25年漁業センサス」、他は「農林水産統計年報」
 (注1) 表の各数値に内水面の値は含まれていない。
 (注2) 四捨五入の関係で、合計が合わないことがある。
 (注3) 神奈川の数値は、国立研究開発法人水産研究・教育機構及び県水産技術センターの数値を除いてあるので、実際の年報の数値とは異なる。

■ 漁業を支える人々

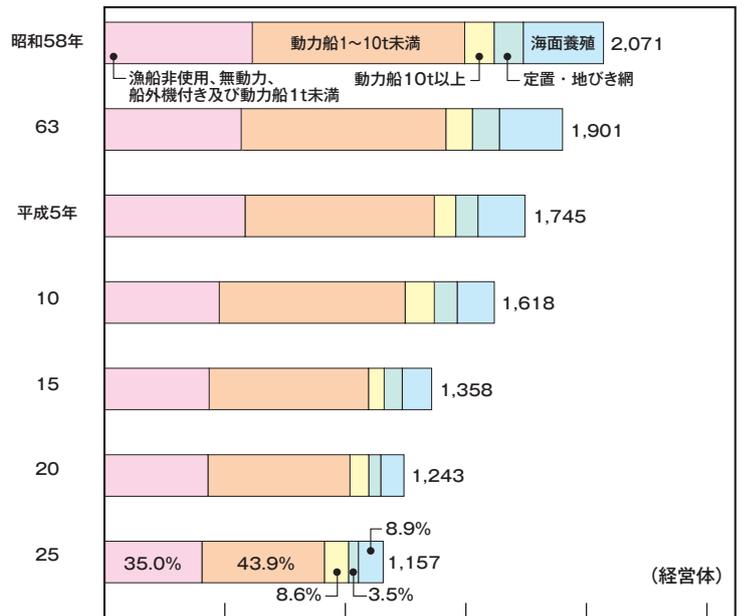
■ 漁業労働力 本県の漁業就業者や漁業経営体の数は、減少傾向が続いています。平成25年の漁業就業者数は2,273人で、そのうち60歳以上が46%を占めています。

漁業就業者数の推移



(注) 就業者数の20年の年齢構成は、15～29歳、30～39歳に変更（以降、変更なし）。

漁業経営体数の推移



〔平成25年漁業センサス〕

漁業を支える漁場、漁港及び漁船

漁場

沿岸漁場

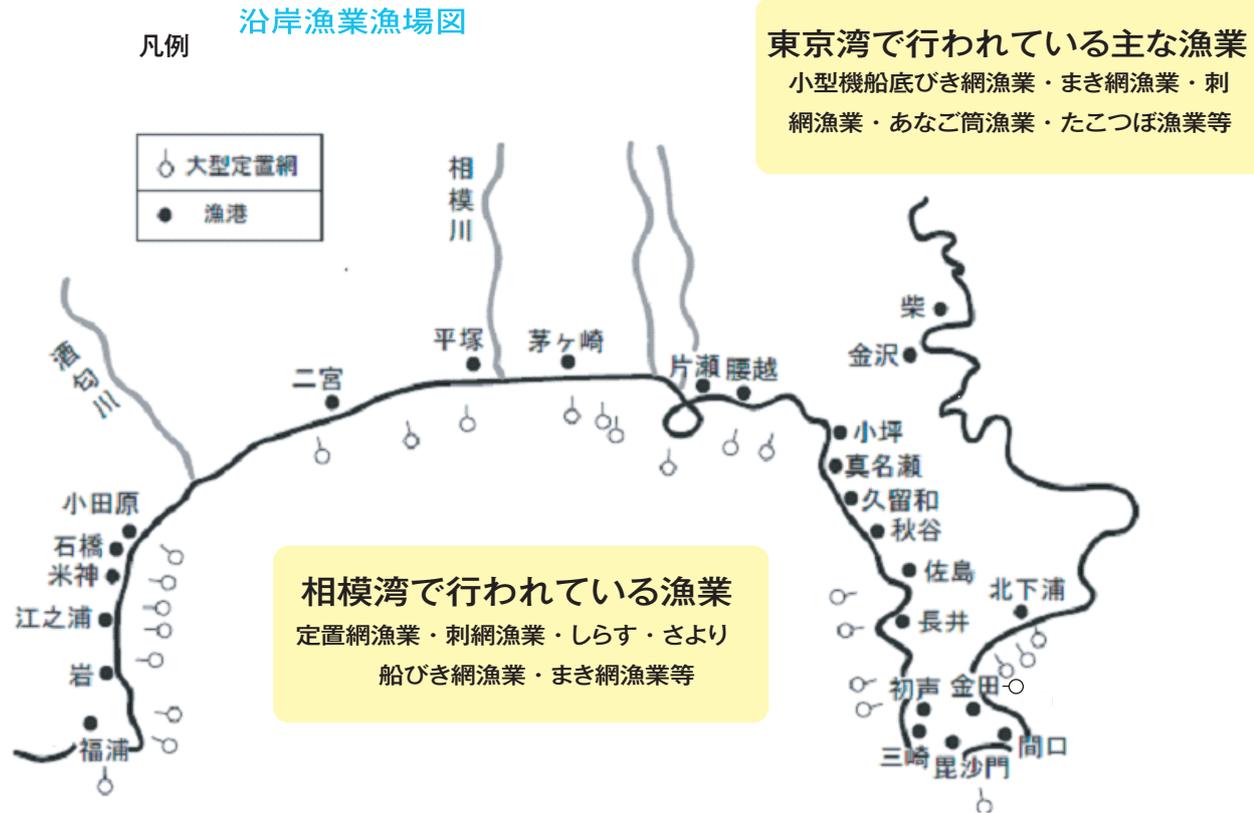
様々な漁業が営まれており、東京湾では、あなご、かれい、しゃこなど内湾性の魚介類が、また相模湾では、あじ、さば、いわしなどの回遊性の魚類が主に漁獲されています。

沖合漁場

伊豆諸島周辺海域を主漁場として、さば、きんめだい、むつなどを漁獲しています。

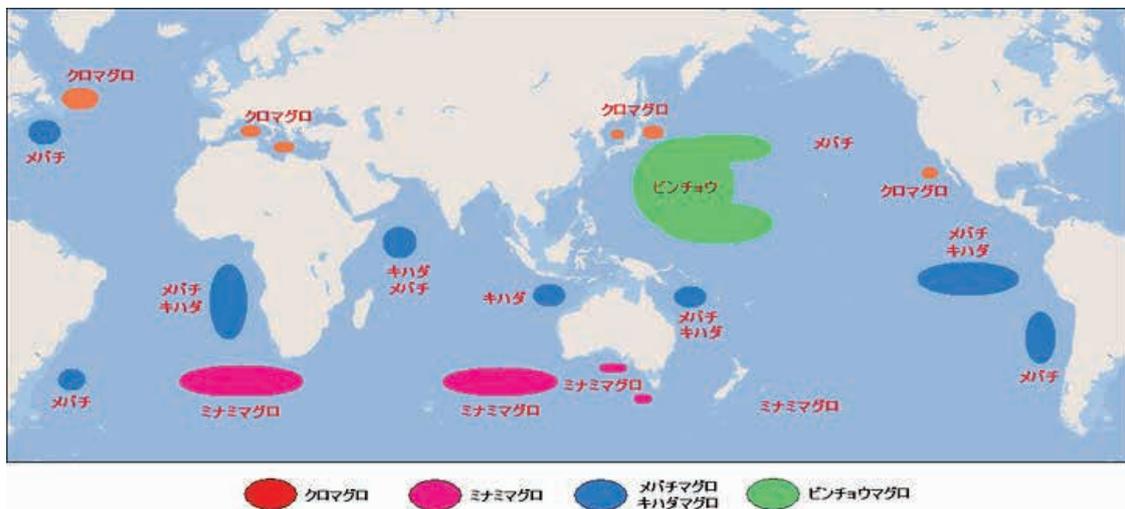
遠洋漁場

遠洋まぐろはえ縄は世界の広い海域を、大中型まき網はインド洋や太平洋を漁場として、まぐろなどを漁獲しています。



主なまぐろ漁場図

まぐろの中で最高級品とされるクロマグロは北半球の海域に、次いで高級品とされるミナミマグロは南半球の温帯域に多く生息しています。また、メバチマグロ、キハダマグロ、ビンチョウマグロは世界中の海に広く分布しています。



〔TUNA QUEEN WEB SITE〕

■漁港 県内には第一種漁港から特定第三種漁港まで大小25の漁港があり、漁船の係留や水揚の場となっています。一番水揚量が多いのは三崎漁港で、平成27年の全県水揚量29,850トンの54%を占めています。また、川崎港を除く6港湾にも、漁港同様の機能を備えた区域があり、漁業活動に利用されています。

■第一種漁港

利用範囲が地元の漁業を主とするもの

■第二種漁港

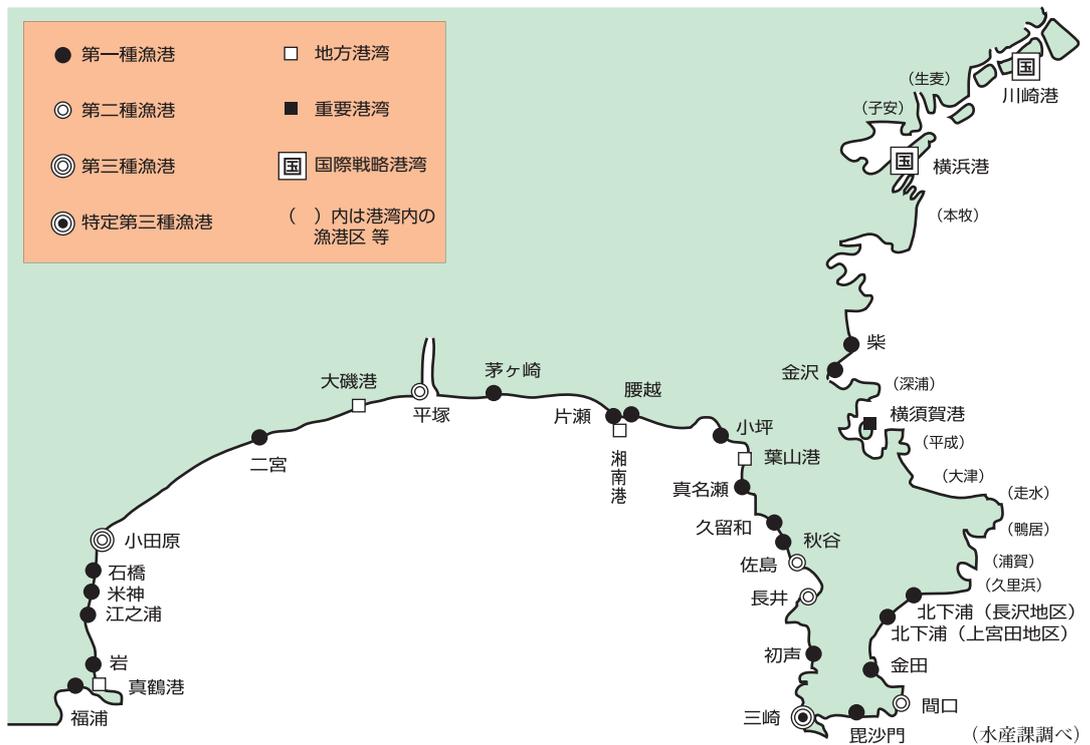
利用範囲が第一種漁港よりも広く、第三種漁港に属さないもの

■第三種漁港

利用範囲が全国的なもの

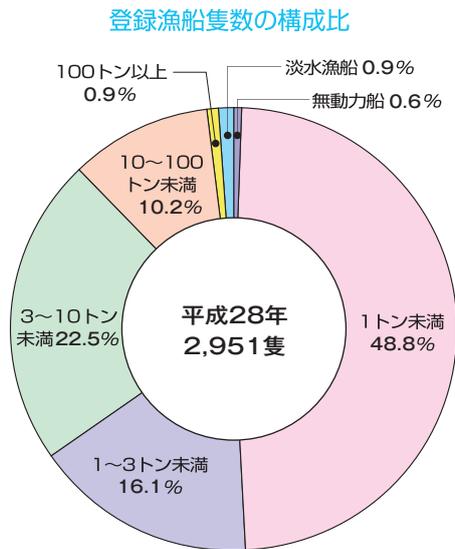
■特定第三種漁港

第三種漁港のうち水産産業の振興上特に重要なもの



■漁船登録隻数

本県の平成28年の漁船登録隻数は2,951隻です。また、登録漁船の87%が沿岸漁業に従事する10トン未満の小型漁船で占められています。



(注) 淡水漁船以外は海水漁船
(水産課調べ。平成28年12月末現在)



三崎漁港（特定第三種漁港）



小田原漁港（第三種漁港）

■豊かな海の恵み

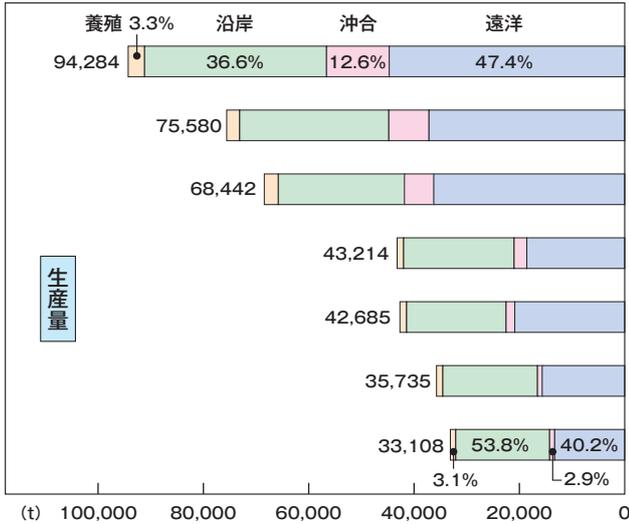
漁業の生産動向

■海面漁業・養殖業の生産量、生産額の推移

平成26年の本県の海面漁業と海面養殖業の生産量は33,108トンで、定置網などの沿岸漁業が54%、まぐろはえ縄などの遠洋漁業が40%、さばたもすくいなどの沖合漁業が3%、わかめやのりの生産を主とする海面養殖業が3%を占めています。

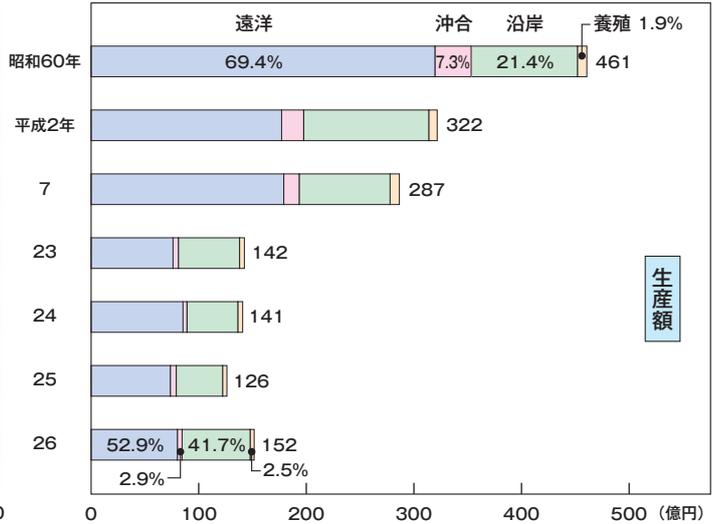
生産額では、152億円のうち、沿岸漁業が42%、遠洋漁業が53%、沖合漁業が3%、海面養殖業が3%を占めています。

海面漁業・養殖業生産量の推移



(注) 19年以降の沿岸、沖合、遠洋別生産量は非公表のため各業種の操業形態から推定して分類した。

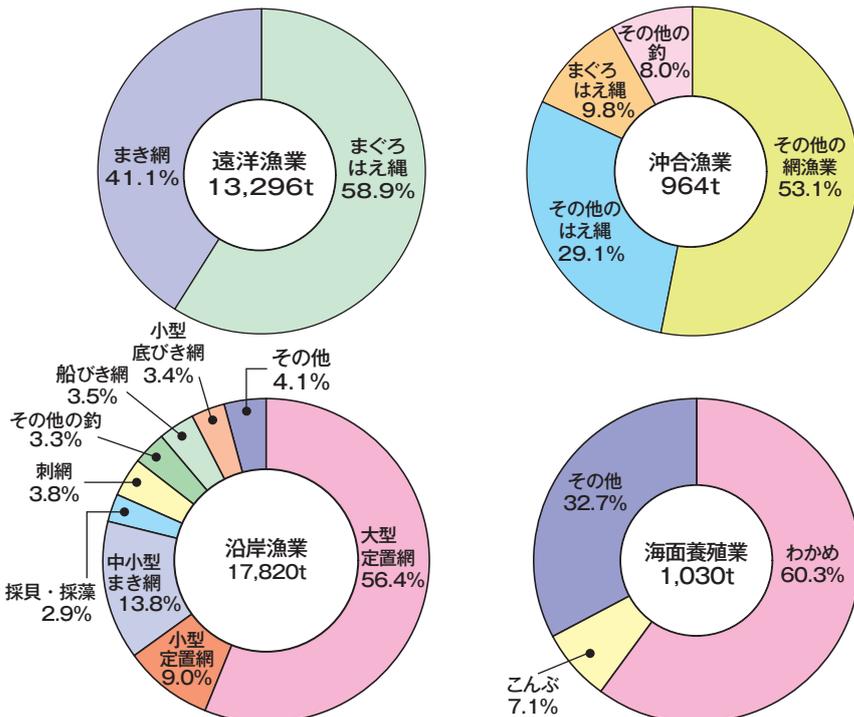
海面漁業・養殖業生産額の推移



(注) 19年以降の業態別生産額は非公表のため、魚種別生産額をもとに計算した推計値。

「農林水産統計年報」

海面漁業・養殖業の生産量構成比 (平成26年)



「農林水産統計年報」 (注) 「その他」はのり類、貝類で生産量は非公表。なお、「その他」はのり類が主 (水産課調べ)。



まぐろの水揚げ風景 (三浦市)

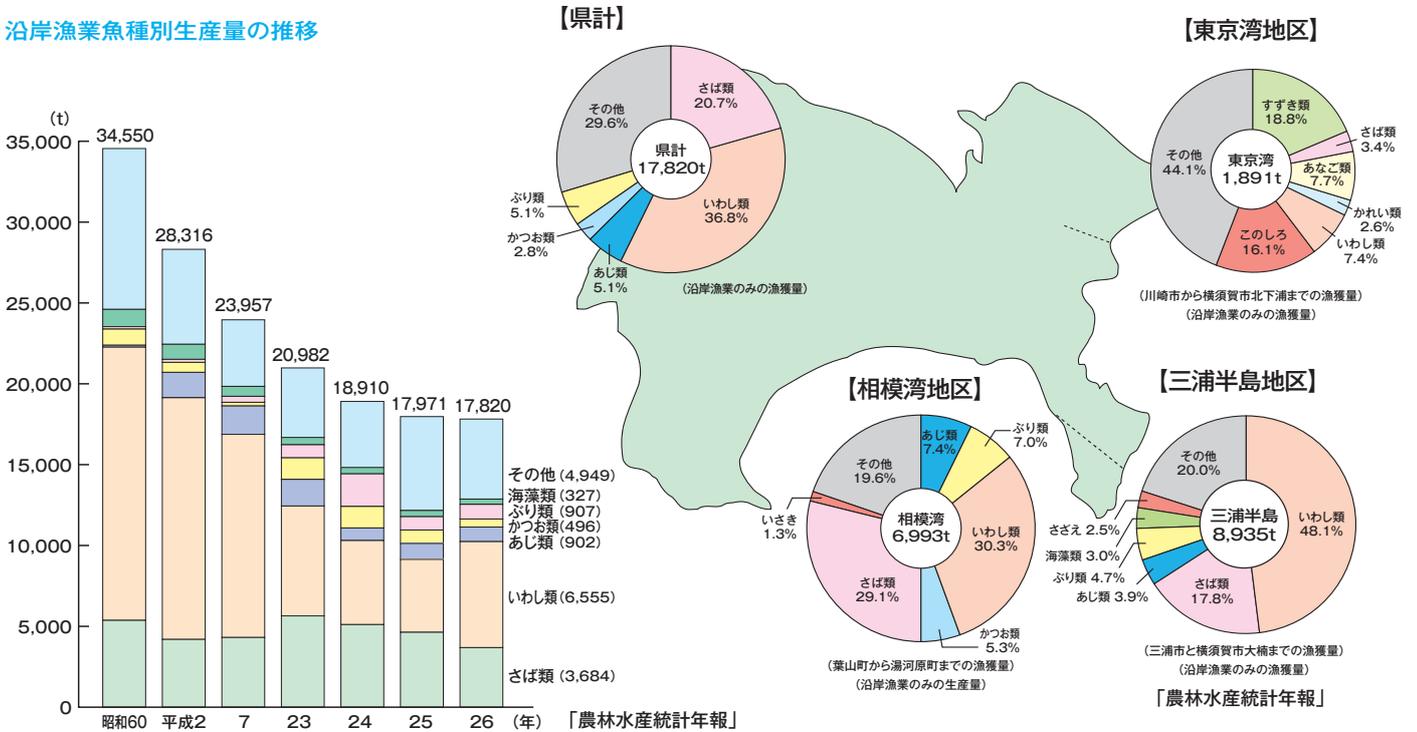


みづき漁業

■主要魚種別構成

平成26年の沿岸漁業魚種別生産量の第1位は、いわし類で6,555トン、次いでさば類3,684トン、あじ類902トンの順となっています。地区別にみると、東京湾地区は、小型底びき網やまき網などによるこのしろ、すずき類やあなご類、三浦半島地区は、まき網や定置網によるいわし類、さば類、相模湾地区では、定置網によるいわし類、さば類及びぶり類の漁獲量が多く、地区ごとに特色ある魚種構成となっています。

沿岸漁業魚種別生産量の推移



■つくり育てる漁業、守り育てる漁業

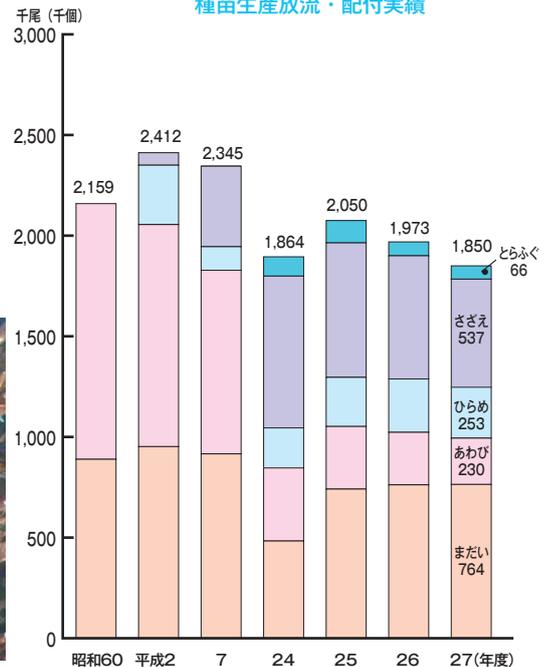
栽培漁業、資源管理型漁業

本県では、まだい、ひらめ、とらふぐ、あわび及びさざえなどの人の手によって育てた稚魚等を放流する栽培漁業を進めています。その中でも、まだいは漁業者に加えて、広く遊漁者などからの協力金も得て積極的に事業を進めています。さらに、栽培漁業にとどまらず、広く水産資源を持続的に有効利用するため、資源管理型漁業を推進し、漁業者による自主的な取組も積極的に支援しています。



マダイ稚魚、飼育作業 (右はマダイ稚魚：ふ化後100日前後、7～8cm)
(公財) 県栽培漁業協会提供

種苗生産放流・配付実績



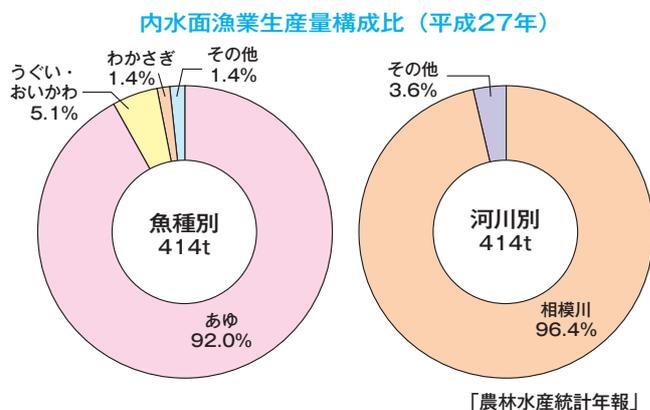
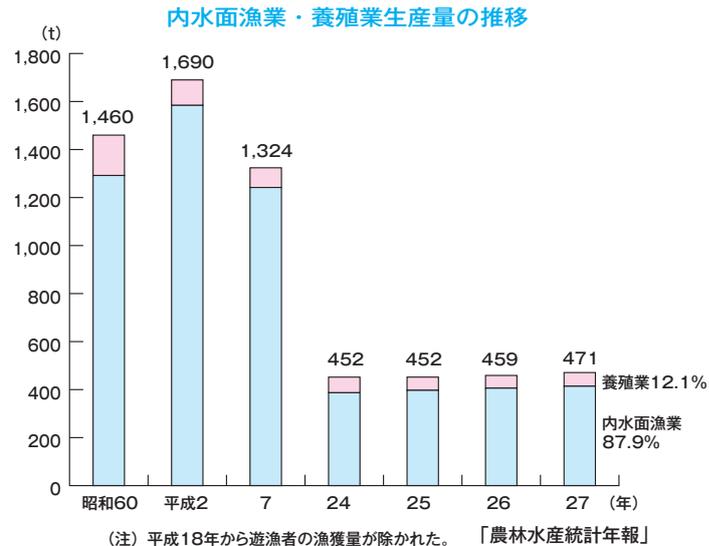
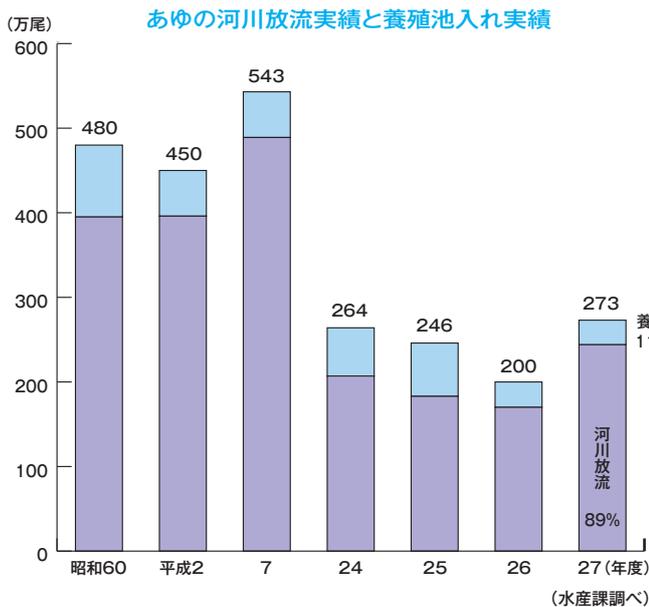
(水産課調べ)

■ 川や湖で行われている淡水魚の採捕や養殖業

内水面漁業・養殖業

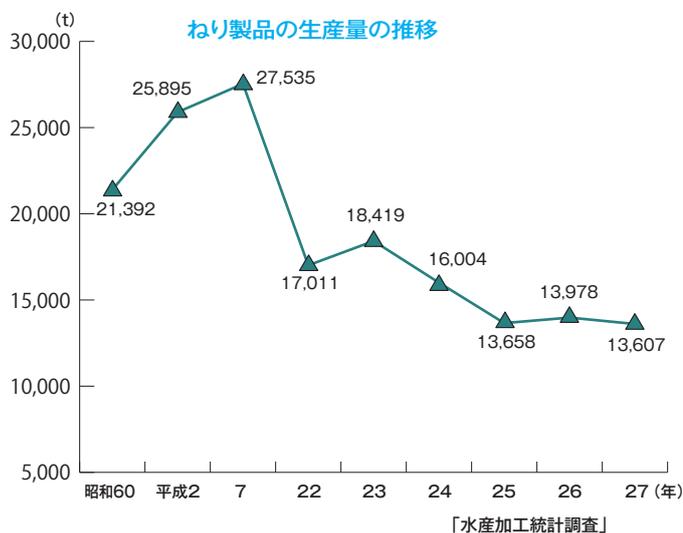
相模川、酒匂川、芦ノ湖などでは、あゆ釣やわかさぎ釣などが行われています。これらの河川・湖沼では、漁業協同組合などが毎年種苗を放流しています。

また、あゆやにじますなどの養殖業も行われています。



■ 恵まれた水産資源を生かした水産加工

本県では、小田原のかまぼこや干物、三崎のまぐろやかじきの味噌漬、粕漬等の水産加工品が生産されています。中でも小田原かまぼこは、全国的にも有名ブランドとして、地域団体商標にも登録されています。かまぼこをはじめとした本県ねり製品の平成27年の生産量は、13,607トンとなっています。



消費者ニーズに合わせて開発中の水産加工品



小田原かまぼこ